
すまいる

仲村 歩

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すまいる

【Nコード】
N8106Y

【作者名】
仲村 歩

【あらすじ】
啓太は負の感情と共に笑顔を失った。
そんな啓太が街で見た物は
『あなたの不幸をください。私の幸せを上げます』
そんなカードを両手で持っていた天使の見習いだった。
10000hit記念・クリスマスラヴファンタジー

天使の見習い

また、気忙しい季節がやってきた。

街中はクリスマス一色に染まり。1年で一番輝いている。

「あと2日か」

空を見上げるとビルの間に真っ黒にしか見えない小さな夜空が見える。

こんな街中では晴れていても星なんて見える方が珍しい。

朝の天気予報は雨が雪になるかもと言っていた。

まだ、降りだしては無いが厚い鉛色の雲に覆われているに違いない。大通りに目をやると忙しく車が行き交い、カップルや忘年会帰りの酔ったサラリーマンたちが歩いている。

「今年はホワイトクリスマスかなあ」

「そうだと良いね」

すれ違ったカップルからそんな会話が流れてくる。

ショーウィンドウに目をやると酔っぱらったサラリーマンらしき背広姿の男が2人、小柄な女の子に絡んでいた。

ナンパでもしているのかこの街じゃ日常茶飯の事でふだんなら俺も気にも留めなかった。

「ねえねえ、良い事をしてくれるの？」

「えっと、ほわっと幸せになれますよ」

その女の子は茶髪と言いか不思議な髪の毛の色をしている。

首元にフワフワの襟が付いた真っ白い服でこの時期に良く見かけるミニスカサント白バージョンみたいな格好をしている。

そして手には大きめのカードの様な物を持っていて不思議な言葉が書いてあった。

『あなたの不幸をください。私が幸せを差し上げます』

新手の新興宗教かはたまた電波な女の子なのか。

そんな事よりも俺が気になったのは彼女がとても儚げに見えた。

存在が薄いと言えば良いのだろうか。

「バカじゃねえの」

気付くとそう言っただけの男を蹴り倒していた。

「何だ？ おまえ……」

尻餅を付いた男を腰に手を当てて見下ろすと語尾が尻すばみになり2人連れ添って逃げて行った。

彼女を見て俺は目が覚めた気がする。

こんな状況でも彼女は笑っていた。

笑うと言っただけでいた。

それは作り笑顔ではなくまるで地のままの様な気がした。

「こんな所でそんな事をしてるとまた絡まれるぞ。家に帰りな」
これ以上係わりをもつのが嫌で自宅のマンションに向い歩き出した。

大通りから脇道に入ると途端に街灯が少なくなり薄暗い道が続いている。

その先に俺が住んでいるマンションがあった。

しばらく歩き振り返ると後ろから付いて来ていた彼女も立ち止まった。

「何か用なのか？」

俺の問いに対して彼女は不思議そうな顔をして首を傾げた。

「家に帰れと言っただけだ」

「帰る場所はありません。私は天使の見習いですから」

電波系少女と言う奴なのだろうか、厄介なのに捕まった気がする。

「で、その天使の見習いが俺に何の用なんだ？」

「あなたの不幸を私に下さい」

「俺は不幸じゃねえよ」

「それじゃ何故あなたの瞳はそんなに哀しい色をしているんですか」
彼女の言葉に返す事が出来なかった。

「俺の目は日本人には珍しい碧眼だからそう感じるんだろう。それに俺の瞳なんか濁りきってるよ」

「違います。何処までも澄んだ哀しみの色で満ちています」

「そんな事は君に関係ないだろ。付き纏わないでくれ」

「嫌です!」

今、はつきりと拒絶された?

それでも不思議な事に彼女に怖さは微塵も感じられなかった。

「天使の見習いですから」

今、心を読まれた?

そんな筈はない夢で普通じゃないけど普通の女の子にしか見えな
い。

「私、あなたに決めちゃいましたからあなたになら見せちゃいます」

そう言つて俺に向かつて両手を広げて飛ぶ様にして向かつてきた。

目の前であり得ない事が起きている彼女と俺は5メートル近く離れ
ていたはずだ。

段々近づいてきた彼女が俺の腰に抱き着くように腕を回すと軽いシ
ョックを受けて温かい物に包まれたような感覚がした。

天使と言つたよな。

頭の上に光の輪があつて背中に白い羽が生えているあれの事なのか?

でも、目の前に居るのはちよつと電波な女の子で。

それに天使なんてこの世に……確かに飛んで……

「今、飛んだのか?」

「はい、こんな事も出来ますよ」

俺から少し離れた彼女が体を回転させると来ている洋服が瞬時に赤
と白のミニスカサントに変わった。

「この服はこの時期限定なんです」

「で、もう一度だけ聞くけどその天使の見習いが俺に何の用事なん
だ」

「それは、クチュン」

可愛らしいクシャミの音が聞こえて女の子が小さな鼻に指を当てて
鼻を嚙っている。

大きなため息を付いて彼女に声を掛けた。

「どうあっても付いて来るんだな」

「はい」

「それじゃ、付いて来ればいい」

「はい！」

振り返りゆつくりと歩き出す。

俺の目の前でイリユージョンの様な事を平気で見せた彼女の事だ、俺が逃げ回っても何処までも付いて来るのだろう。

それに見失ったとしても目の前に現れる想像が容易にできる。

それなら温かい部屋で話を聞く方が建設的だし、電波系と言えども女の子に風邪をひかせるわけにはいかないと思ってしまった。

家に入りリビングのソファーに彼女を座らせて何か温かい物と思い寝起きに飲んでいる牛乳に砂糖を加えてホットミルクを作る。

その横でお湯を沸かしてインスタントのコーヒーを淹れた。

マグカップに入ったホットミルクを彼女の前に置くと彼女が両手で持って口に運んでいる。

「温かい」

「今日は冷えるからね」

俺もコーヒーを口にする。砂糖を入れると眠気を誘うのでブラックだ。

マグカップをテーブルに置いて話を切り出す。

「それじゃ話を聞かせてもらおうか」

「はい。私達天使の見習いは困っている人や苦しんでいる人を助ける事で天使になれるんです」

「つまり不幸な人を助ける事って事かな」

「はい、その為に私達は力を差し上げるんです」

「その君達の力って何なの？」

「それは私達の存在の力です」

「存在の力ってそれが無くなれば君達は存在できなくなるんじゃない」

「そうですね消えてしまいます。でもそうする事で天使に昇格する

事が出来るんです」

だからあの言葉だったのか。

『あなたの不幸をください。私が幸せを差し上げます』

にしても彼女達が天使ではなく見習いなら天使って何なんだ。

疑問に思った事を正直に彼女に聞いてみた。

「それじゃ聞くけど天使って何？」

「えっと光の存在です。ですから普通は目にする事が出来ません。

人の言う所の奇跡なんて呼ばれている事が天使の仕業です。あつても光の存在がとても大きいと時に具現化される時があります」

具現化と言われてもピンとこない。

何故なら天使なんて存在は宗教画や二次創作物なんかにはしか出てこないからだ。

それに実際に見た人なんて皆無に達しない。

でもそんな天使の見習いが俺の目の前で美味しそうにホットミルクを飲んでいる。

「あのさ、何で俺なの？」

「えっと顔に不幸が現れています」

「……」

マジで殴りたくなってきた。

「あのう、すいません。お腹が空いて」

「はぁ？ 天使もお腹が空くの？」

「はい、実体を保つのに凄く力を使うんです。ですから実体の時は普通にお腹が空きます。それに昨日から何も食べてなくて。それに天使じゃなくて見習いです」

怒る気も失せてきた。

儚げに見えたのは実体を保つ力が落ちて来ていたからなのだろう。

仕方なくキッチンに置いてあったバイト先でもらったクッキーや焼き菓子を彼女の前に置くとおいしそうに頬張り始めた。

「美味しいです」

「話を続けていいかな」

「はい」

「見習いの上が天使で天使の上に全知全能の神様がいるんだね」

「ん」と、神様とは少し違います。主様が知らない事は無いですけど全知全能じゃないですよ。でも命を生み出す事が出来るのは主様だけです」

「へえ、そうなんだ」

神なんてこの世に存在しないと思っている俺でも妙に納得してしまう回答だった。

「で、俺は何をすれば良いのかな？」

「あなたの望みを教えてください」

「俺は今の生活に十分満足しているしこれ以上の望みなんて」

「でも、幸せそうには見えません。それに」

今まで即答していた彼女が急に口を濁した。

「それに、どうしたの？ 俺には言えない事？」

「いえ、昇格試験の期日があと2日なんです。だから何としても天使になりたいくて」

「ゴメン、俺は力になれそうにないや」

「それじゃ、私に恋を教えてください。恋をすれば天使になれるって」

「恋って恋愛の恋？」

「はい、恋です」

それこそ俺には無縁の物だった。

齢19にして年齢の数が彼女いない歴そのまんまである。

「そんな恋なんて俺には教えられないよ」

「そうですか」

彼女が肩を落とし意気消沈している。

「どうして恋なの？」

「天使の昇格試験は難関なんです。合格できる人が殆ど居なくて。それでも試験に落ちても天使になった先輩方が沢山いるんです。だから」

「大変なんだね天使の見習いも。自分の命を削って他人を幸せにするか恋を知るかなんだ」

「はい」

2日が経てば大人しく空の世界にでも帰るのだろう。

今すぐに寒空の下に放り出しても結局は付き纏われるのだろう。

それならば全く役に立たない俺に出来るのは彼女を放り出すのではなくこの家に置いておく事かなと安直に思ってしまった。

「俺は君に何も教える事は出来ないけれど君がよければ試験の期日までここに居れば良い」

「本当ですか？」

「構わないさ、無駄にデカイ家だしね。使っていない部屋は沢山あるからね」

「あの私からも質問して良いですか」

「良いよ」

「お1人なんですか？」

「1人暮らしの男が女の子を連れ込むのは非常識だよね」

「いえ、そうではなくお1人なのに大きな家に？」

彼女の質問に少し戸惑ってしまう。

それでも彼女が2日とは言えここで暮らすと言うのなら話しておいた方が良いでしょう。

「まあいいや。君がここに居ると言う事は直ぐに判ってしまう事だから説明しておくよ」

「はい、宜しく願います」

彼女が真っ直ぐに俺の顔を見て軽く握った拳を膝に置いた。

「このマンションは元々俺の親父が購入して家族で暮らすはずだったんだ。俺の学校の事情でとりあえず俺が1人で先にこの家に来ていた。その数日後には荷物が届き親父やお袋それに姉貴に妹が来る筈だった。でも荷物は届いたけれど俺の家族は来なかった」

「どうしてですか？」

「親父が運転する車に乗ってここに向かう途中で事故に遭ったんだ。」

トンネルの中でタンクローリーに追突され車は大破。そしてガソリンと軽油を満載していたタンクローリーは爆発炎上した。俺が家族と再会した時には親父もお袋も姉貴も妹も小さな木箱に入れられていたよ」

「お辛かったでしょう」

彼女の言葉に対し『清々したよ』とか『全然』などと捻くれるでもなく強がるでもなく心の内を素直に口にした。

「どうなんだろうね」

それが口から出た言葉だった。

マンションのローンも親父が入っていた保険で補い。

家族が入っていた生命保険で無理をしなければ一生暮らせるほどのお金が入ってきた。

それらは全て家族と引き換えに得た物だけどそれがどうなのかは俺には分からない。

それ以上彼女は何も聞いてこなかった。

夜も遅くなったので彼女が使えるそうな部屋に案内する。

その部屋は姉貴と妹が使うために用意された部屋だった。

ベッドが置かれ大きめのクローゼットが備え付けられている。

部屋の片隅には段ボール箱が積んであり箱には何が入っているか記されている。

それを見ながら洋服などが入っている段ボールを数箱あけた。

「この中の服はサイズが合えば着ていいから。まあ君が気にしなければだけど」

「お姉さまと妹さんの服ですね」

「うん。姉貴と妹は歳が離れているけれど背格好が同じだったから似たようなサイズだと思う」

「それでは遠慮なく使わせて頂きます」

「それと風呂なんかも適当に使って欲しい、タオルなんかは風呂場にあるから」

「はい、ありがとうございます」

「あんまり遠慮しないでくれる。その方が俺も気が楽だから」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ」

お休みなんて言葉を交わしたのはいつ以来だろう。

覚えてない程昔ではない筈だ。

自分の部屋に行きベッドに横になると直ぐに眠りに落ちた。

S a n d a n d B a k e d

翌朝、目覚ましではなくキッチンから聞こえる物音で目が覚めた。キッチンに行くとAラインのモコっとしたグレーのワンピース姿の女の子が料理をしていて俺に気付き振り返った。

「あっ、あの。おはようございます」

「俺の名前は啓太だよ」

「啓太さん、勝手に使わせて頂いてます」

「構わないけれど何もないでしょ」

「任せてください」

俺の朝飯と呼べるものは牛乳と食パンにジャムを塗ったものくらいだ。

冷蔵庫にも食材と呼べるようなものは殆ど入っていないはずだ。

でも、テーブルに並んだ物はちゃんとした朝ご飯だった。

トーストにカフェオーレ、それに冷凍ホウレンソウ入りの卵焼きに小腹がすいた時に俺が良く食べる魚肉ソーセージが炒められて添えてあった。

「凄いな、久しぶりにまともな朝ご飯を見たよ」

「私、料理だけは得意なんです」

「そうだ君の名前を教えて欲しいのだけど」

「名前ですか？」

「うん、呼ぶ時に困るだろ」

何故か俺の質問に彼女が首を傾げている。

そして俺を見て教えてくれた。

「えっと、S I 4 0 N - 7 9 7 4 1 5 4です」

「それが君の名前なの？」

「すいません。私達見習いには認識番号しか無いんです。天使になって初めて名前をもらえるんです」

「それじゃなんて呼べばいいの？」

「SI40N-7974154と」

「SI40Nって物じゃないんだから」

認識番号で呼んでくれと言われても困ってしまう。

俺の世界で人を番号で呼ぶなんて、知る限り塀の中ぐらいなものだろう。

「シフォンじゃ嫌かな」

「シフォンですか？」

それはSI40Nの語呂合わせで、俺のバイト先で扱っている商品の名前の一つだった。

昔読んだ漫画で370（みなわ）や337（ななみ）なんて言う語呂合わせのアンドロイドが出てくる漫画を読んだ覚えがある。

「あの、啓太さんが呼んでみてください」

「俺が君の名前を？」

「はい」

「シフォン」

「は、はい。何だか名前つくすぐつたいです」

彼女が顔を赤らめて嬉しがっているのが良く判る。すると彼女が俺の顔を見て目を伏せた。

「ゴメンね」

「えっ、あの、何で啓太さんが謝るんですか？」

「俺、無愛想で怖そうな顔をしているだろ」

それは俺を見た殆どの人を感じる事だと経験から知っている。

中には怖がって彼女の様に目を逸らして逃げていく人だっていた。

「そんな事は無いです。それにそれなら私と一緒にです。不幸をくださいと言う私の事を気味悪がったり変な目をして逃げていたりする人が沢山います。でもそんな私を啓太さんは受け入れてくれました。だから啓太さんが優しい人だって知っています」

彼女が笑顔でそう言ってくれた。

そんな彼女を見ていると胸の奥がチリチリする。

それは言葉では表しようがない感じで。

俺にも普通に接してくれる友達が多くはないがいる。

そんな友達のあいつ等からは感じた事のない感覚だった。

時計を確認すると深く考えている時間はなさそうだった。

「俺、バイトに行かないといけないから留守番を頼めるかな」

「バイト？ お留守番ですか？」

「一応、俺は大学生なんだけど小遣い稼ぎに仕事をしているんだ。

今は冬休みで大学が休みだから早い時間から仕事に行っているんだ」

大学の冬休みなんて高が知れているしバイトをしなくても学費を納めても楽に暮らしていける。

そんな俺がバイトをする理由はただ一つ。

暇を持て余してしまうからと余計な事を考えなくて済むからだった。

「お仕事ですか。啓太さんの仕事場を見たいです」

「でも、仕事中は相手出来ないよ」

「はい、構いません。私は適当に時間を潰します。駄目ですか？」

試験の期日まで残り2日なのに適当に時間を潰すって、でも俺と一緒に居られないのなら彼女にとっては同じように無駄な事なのだろう。

それを無下に駄目だと断る理由は存在しなかった。

「それじゃ外は寒いから上着を持ってきて」

「はい」

素直で可愛くて凄く良い子だと思う。

でも俺の心は反応すらしなかった。

彼女が部屋に戻り襟がベージュのファーになっている茶色いコートを着てきた。

下に着ているワンピースはグレーで落ち着いた雰囲気になっている。コートは大人っぽい姉貴の物でワンピースは可愛い物が好きな妹の物だった。

2人の物を合わせるとこんな風になるのかと感心してしまう。

「それじゃ行こうか」

「宜しくです」

姉貴と妹が珍しく共同で買ったスエードのロングブーツを箱から取り出した。

ダークブラウンで履き口に折り返しがあり可愛いボンボンが二つ付いていた。

歩いてバイト先まで向かう。

この辺りは学園都市として再開発され多くの高校や大学が集められている。

その為か駅前にはカジュアルな飲食店からファッショナブルなお店が立ち並んでいる。

大通りに出るとその先に大きな駅が僅かに見える。

「そうだシフォン」

「何ですか？」

小柄なシフォンが背の高い俺の顔を見上げた。

「大丈夫だと思うけれど俺以外には天使の話をしたり力を使ったりするのは無しにしてくれないかな」

「判りました。でも力って言っても願を叶える事と少しだけ飛ぶことが出来るくらいですから」

「そっか。じゃなるべく飛ばないようにね」

「はい」

シフォンが楽しそうに腕を後ろに回して俺の横を歩いている。

俺の鉄の鎧が浸食されてきている事なんて気付く術もなかった。

しばらくすると『Sand and Baked』と言う看板が出ている俺のバイト先が見えてきた。

バイト先はサンドイッチと焼き菓子がメインのカフェになっている。もちろんテイクアウトも可能だ。

無愛想な俺が接客なんて出来るはずもなくキッチンで働かせてもらっている。

中々バイトが見つけれなかった時に半ばあきらめ気味で面接を受けて、ここの店長は俺の事情も判った上で雇ってくれたとても良い人だ。

「それじゃ仕事をしてくるから」

「はい、判りました」

中抜けの様な長めの休憩時間と仕事が終わる時間をシフォンに告げて俺は店の裏口に向かった。

着替えを済ませてタイムカードを押す。

この店の制服は黒で統一されている。

今の時期は黒の開襟シャツにキッチンは黒いズボンで黒いエプロン。ホールの女の子は黒いスカートにシヨートタイプのこげ茶色のカフェエプロンをしている。

夏場は開襟シャツがポロシャツに変わる。

「おはようございます」

「おい、マイル。あの子ってマイルの彼女か？」

「違いますよ。事情があって明日まで俺が預かる事になった女の子です」

「まあ、マイルなら間違いなんて事ないからな。でも凄く可愛い子だな」

「そうですね」

「相変わらずだな、お前は」

キッチンに入ると店長が駆け寄ってきてシフォンの事をいきなり聞かれてしまう。

この店は通り側が大きなガラス張りになっていてキッチンもオープンスタイルになっている。

それ故に通りから焼き菓子をオープンから取り出すのが見えたりサンドイッチを作る作業が見えたりする。

そして客席も通りから見える造りになっている。

因みにマイルは俺のニッケームだ。

俺の仕事は基本店長の補佐で焼き菓子を焼いたりサンドイッチを作

ったりする。

臨機応変にと店長が教えてくれたとおり何でもする。
結構な人気店でそれなりに忙しい。

波が一段落して時計に目をやると休憩までにはまだ一時間ちょっとの時間だった。

「おい、マイル。今日はもう休憩に行け」

「えっ、まだいつもの時間まで1時間くらいありますよ」

「良いから、ほれ」

店長がガラスの外の通りに目をやっている。

俺が通りを見るとシフォンが店の前でガードパイプに腰掛けて微笑んでいる。

すると2人組の男がシフォンに近づいていき何か話しかけている。

お決まりのナンパイベントだろうと容易に想像がつく。

何処かの大学生だろう。

ナンパされていると言うのにシフォンは常に笑顔で対応している。

「少し前からずっとあの状態の繰り返しだ。見ている俺の方が冷や冷やするぞ」

「あいつなら大丈夫ですよ」

「どうしたらそんなにクールになれるんだ。良いから俺の言う事を聞いて休憩に行って来い」

「はい、判りました」

店長に尻を叩かれてバックヤードのロッカー室に入り黒いダウンコートを着て裏口から大通りに出ると2人組がまだシフォンに食い下がっていた。

「シフォン！」

「啓太さん、どうしたの？」

俺がシフォンの名を呼ぶと2人組が驚いた様な顔して足早に立ち去った。

明らかに俺の顔を見てギョツとしていた。

するとシフォンが駈け出して来て俺の腰の辺りに抱き着いてきた。
「どうしたんだ。時間を潰すんじゃない」

「ブラブラするのに飽きちゃいました。それでここで啓太さんを待つてようと」

「そうしたら男達が声を掛けて来たと」

「はい、あれって何ですか？」

俺が思った通りシフォンはナンパなんて事を知らなかった。

「英語で言つとピックアップかヒットオンかな」

「私はピックアップなんかされません。啓太さんが居ますから」

少し怒ったような顔でシフォンが見上げる様に俺の顔を見ながらそんな事を言う。

彼女の瞳は何処までも真っ直ぐで調子が狂ってしまふ。

通りからキッチンを見ると店長が『グッジョブ！』と親指を立てて真っ白い歯を出して笑っている。

溜息をついてシフォンの手を取り店の前から早々に離脱する。

とりあえず歩き出すと通りの向こう側から声を掛けられた。

「マイル君！ 後からね」

「うわあ、彼女？」

そんな事を言いながら2人のOLさんが手を振っている。

愛想笑いすら出来ない俺は軽く会釈して手を振って全否定しておいた。

「啓太さん、あの方は？」

「お店の常連さんだよ」

「でも、啓太さんの事をマイルって」

「ああ、それは俺のニックネームだよ」

「まるで外人さんみたいで格好良いです。それに黒髪に黒い服に青い瞳って凄く素敵です」

シフォンの言葉で自分の格好を見ると確かにカラスの様に真っ黒だった。

唯でさえ碧眼の俺は目立つので普段から地味な色合いの服しか着ない、黒のダウンコートは偶々出る時に手にしただけだ。

長い黒髪に黒い衣装を着け青い瞳で体に傷跡のある女の子のキャラがネットで話題になっていたような気がするがそれは放置する。

「なあ、シフォン。格好良いとか素敵とか平気で言うけど恥ずかしいか？」

「恥ずかしくは無いです嘘じゃありませんから」

「まっ、冗談半分で聞いておくよ」

「天使は決して嘘は付きません。天使の禁止条項第一条の一は『天使は人を欺いてはならぬ』ですから。まだ見習いですけど」

「それじゃ、天使の決まりごとに人を喜ばすって決まりがあるのか？」

「それは……ありません。天使の見習いは人の望みを存在の力で叶えるだけです。ただ」

「ただ？」

「私は感じたままを素直に口に出しただけです。この感じが何なのかは私には判りません」

少し寂しげに俺の顔をシフォンが見上げている。

俺には微笑んでやる事も出来ず、ただシフォンの頭の上に手を置いて撫でてやった。

「啓太さんの手って温かいです」

「他にはどんな禁止事項があるのかな？」

「第二条の叶えられる願いを断ってはならないとか、ええっと」

シフォンが気まずそうな感じで何かを考えているように見えた。

「まあ、良いや。飯でも食うか」

「はい、ご飯ですね」

天使の見習いも天使も純粹で真っ直ぐな存在なのだろう。

今の俺にはそれくらいの事しか頭に浮かんで来なかった。

学園都市は綺麗な街でおしゃれな店が多いけど学生の街なので通り

から一本裏道に入ると安い定食屋や飲み屋が点在している。

小綺麗な店に行こうかと思っただけと俺とシフォンでは目立ちすぎるし恥ずかしいのでいつもの定食屋に向かった。

「いらつしゃいませ。お2人さんこちらへどうぞ」

店員のいつものおばちゃんが直ぐにテーブルに案内してくれる。いつもより早い時間なのでそれほど混雑はしていなかった。

「メニューから食べたい物を注文して」

「はい、判りました」

シフォンが頼んだのはなす味噌炒め定食で俺は定番で一番人気の生姜焼き定食を小ライスで注文した。

お店に来る客は学生がメインなのでほとんどの店が安くて美味くてボリューム満点をうたい文句にしている。

そんな店の中でも上位に入るのがここで男子学生でもそのボリュームから小ライスを頼む奴が結構いる。

シフォンにも小ライスを進めたが普通のだと言い切られてしまった。目の前には大盛りのキャベツの千切りに乗せられた皿から溢れんばかりの生姜焼きとなす味噌炒めがあり、俺の前には小ライス（普通の茶碗）と普通のライス（大きな茶碗）に入れられたご飯とみそ汁が湯気を立てていた。

「いただきます」

2人同時に手を合わせて箸を伸ばした。

「ん！ ふごくおいひいでふ」

「凄く美味しいのは良く判るから食いながら喋るな」

「ふあい」

凄く可愛い顔をした女の子が嬉しそうに男も負けそうな勢いでガツガツ食べている。

隣で食事をしている学生が少し驚いた様な顔をしてこちらを伺っている。

男子学生だけじゃなく女の子も良く来る店だが、シフォンの様に男勝りな食べ方をする女の子なんて先ず居ない。

まるで子どもの様にしか見えなかった。

「美味しかったです」

「ほら、ほっぺにご飯粒が付いてるぞ」

指でシフォンのほっぺに付いているご飯粒を指でとって口に放り込んだ。

「啓太さん、お手数をお掛けします」

「俺の事は呼び捨てで良いよ」

「でも」

「俺が良いって言うてるんだから良いんだよ。シフォンって俺と同じ年か一つ下位だろ」

「あの、天使には年齢はありません。でも人と言えば私は180年位生きてます」

思わず飲みかけていたお茶を吹き出すところだった。

「げふお、げふお。180年？」

「はい」

周りはかなり騒々しいのでシフォンとの会話なんて聞いている奴は居ないだろう。

それでも驚いて声を上げてしまった。

「なあ、シフォン達って成長するの？」

「失礼です。啓太さん。あつ、啓太は。私達だって成長します確かに時間の流れが違うからとてもゆっくりですけど」

「ゴメンゴメン、そうだよ、最初から大人になんてなれないもん
な」

普段なら店に戻りバックヤードで昼寝をするのだがシフォンが一緒なので定食屋を出て街中を少し歩くことにする。「啓太、あれは何ですか？」

シフォンはまるで子犬の様に色々な物に興味を示し、その度に繋いでいる俺の手を引っ張って突撃していく。

一つ一つきちんとシフォンに判る様に説明していく。

デートってこういう事を言うのかな。

そんな事が頭の中を過る。

でも、彼女すら出来た事のない俺には良く判らなかつた。シフォンに聞いてもたぶん同じ答えが返ってくるだろう。

それともう一つシフォンに啓太と呼ばれるとまた胸の奥がチリチリした。

一頻り歩き回り休憩時間が終わるので店に戻る。

「それじゃ終わりの時間にな」

「はい、判りました。今度は少し遠くまで歩いてみたいと思います」
「気を付けろよ」

「大丈夫です。一応、見習いですから」

「そうだったな」

店の前で別れてロッカー室でコートからエプロン姿になりキッチンに向かう。

店長が見当たらないので店内を見渡すと窓際の席に店の前で別れた筈のシフォンが座っていて店長と談笑している姿が目飛び込んできた。

「店長、いったい何を？」

「マイルはまた彼女を独りぼちにするつもりなのか？」

「いや、俺は仕事ですから仕方がないじゃないですか」

「そこでだ、彼女にはここでゆっくりしてもらう事にした。それと店長権限で彼女は好きなだけ飲んだり食べたりして良い事にする」

「意味がわからないす」

「まあ、良いじゃないか。マイルも彼女がここに居た方が安心だろ」
「そうですけど」

完璧に店長に押し切られてしまった。

それに店長が言おうとしている事も理解できる。

いつまたピックアップされるか判らないし、中には強引な奴もいるからだ。

するとシフォンが聞かなくても良い事を店長に聞きだした。

「店長さん。啓太は何でマイルなんですか？」

「マイル、彼女の名前は？」

「シフォンです」

「可愛い名前じゃないかハーフかな？」

「そんな感じです」

俺がシフォンの名前を店長に告げると店長がシフォンに笑顔で質問した。

「シフォンちゃんが一番長い英単語って何か知っているかな？」

「英単語ですか？」

「そう、英単語で」

「Pneumonoultramicroscopicsilicovolcanokoniosis（*1）ですか？」

「へえ？」

「あつこれは肺の病気の名前です」

「そうなんだ」

「因みに地名ならTaumatawhakatangihanga
koauauotamateapokaiwhenuakitan
atahu（*2）で、ニュージーランドにある高さ305mの丘
の名前です」

「……シフォンちゃんって博学なんだね」

「店長、仕事をしてください」

「マイルが仕事をしろ。俺は小休憩中でシフォンちゃんと楽しいお喋りタイムだ」

呆気にとられている店長に声を掛けると切り捨てられてしまった。

*1ニューモノウルトラマイクロスコピックシリコヴォルケーノ
コニオシス

*2タウマタファカタンギハンガコアウアウオタマテアポカイフェ
ヌアキタナタフ

溜息をついて仕方なく仕事を開始する。

一通りの事は教え込まれているので次の段取りはだいたい判っている。

店内はお客さんも疎らで店の奥にあるドリンクカウンターでは3人の女の子スタッフが俺と店長のやり取りを見て笑っている。

このお店のスタッフ達は俺の事情を知っているので怖がったりしない。

それでも人付き合いが苦手な俺はそこまで彼女達と打ち解けていないのが事実で忘年会や新年会を店長が開いてくれても正直戸惑ってしまう事が多い。

「シフォンちゃん、これはなぞなぞだよ」

「なぞなぞですか？」

「そう、答えはSMILESだよSとSの間が1マイルも離れているからね」

「本当だ、凄いです。そのマイルが啓太ですか？」

「うゝん。シフォンちゃんは啓太の家族の事は」

「啓太から聞きました」

「そうか、啓太は家族を失ってから全く笑わなくなってしまったらしいんだ。それで啓太の友達が付けた渾名と云うかニツクネームが笑顔から一番遠い男マイルになったんだよ」

「そうだったんですか。私が啓太に『辛かったんだね』って訊ねると『どうなんだろう』って言ってた」

「大き過ぎる傷が全ての感情を切り取ってしまったのかもしれないね。シフォンちゃんには啓太の側にずっと居てもらいたいな」

「でも、それは無理です。約束の日は明日までですから」

「そうか、無理なお願いをしてゴメンね。好きな物を注文してくれて構わないよ。支払いは気にしなくて良いから」

「ありがとうございます」

店長がシフォンに話していた事は俺にとっては今更な事だった。

あの日に全て終わってしまったのだから。

店長がキッチンに戻ってきてしばらくすると店内が慌ただしくなってきた。

シフォンは窓際の席で自分の名と同じ名のシフォンケーキに添えられた特性生クリームを付けながら頬張りオレンジティーを優雅に飲んでいる。

いつもより数段忙しく焼き菓子を追加で焼いたりサンドイッチを急いで仕込んだりしているうちに終わりの時間が迫ってきていた。

「疲れた」

「流石、シフォンちゃんの集客率は抜群だな」

「ああ！」

気付いた時には既に遅しと言っあれた。

何故、店長がシフォンを目立つ窓際に座らせて無料で飲み食いさせたのが判った瞬間だった。

普段は女性客が多いお店なのに今日はカップルには見えない男性客と女性客の組み合わせがやたら多かった。

窓際に座っているシフォンを見て気になった男達が女友達を誘って普段は入りづらいこの店に来ていたと言う構図なのだろう。

女友達にしても男友達に誘われれば当然の様に奢ってもらえて尚且つ人気の店に来られるのだから喜んで一緒に付いて来る筈だ。

まあ、今日一日限定の裏技の様なものだと思った。

「マイルも辞めないでくれよ。うちの看板男子なんだから」

「お疲れ様でした。お先です」

項垂れて店を後にする。

俺が看板男子ね、まるで何々系男子とか言われているみたいだ。確かに俺も目立つ日本人には珍しい碧眼だし背は高いし。

で、マイルなんて呼ばればまるで日本語がバリバリのちよつとシヤйнаハーフにしか見えないのだろう。

これも気付いた時にはって言うやつだ。まあ、大変だけどそれなりに楽しくは感じているから良しとしよう。

笑えないけど……

夕飯を済ませ風呂に入るとシフォンも風呂から上がってきて自分でホットミルクを作って俺が居るリビングのソファーにやってきた。

「啓太、隣に座っても良いですか？」

「構わないよ」

シフォンがちよこんと俺の隣に座り両手でマグカップを持ってホットミルクを飲んでいる。

カップをテーブルに置くと俺に凭れかかってきた。

「今日は沢山歩きました」

「疲れたね。部屋で早く寝な」

「ふあい、啓太は優しい匂いがしまふう……」

「ふう……ってシフォン。自分の部屋で」

シフォンの体から力が抜けて俺の肩に頭を置いて眠りに落ちてしまったようだ。

温かくとても柔らかい物を全身で感じてしまう。

仕方なくシフォンの体を手で支えながら立ち上がり一旦シフォンの体をソファーに寝かせる。

シフォンが使っている姉貴達の部屋にあるベッドに連れて行くため起こさない様にそっとシフォンの体を抱き上げた。

すると鼻をくすぐる様な良い匂いがして胸の奥で何かがカチンと何かが嵌まる様な音がしたような気がした。

でも今はそんな事に気を取られている場合ではなくシフォンをベッドで寝かせるのが最優先事項だった。

シフォンをベッドに寝かしつけ自分の部屋に戻ると仕事の疲れからかあの音が何なのか気にする間もなく俺自身も深い眠りに落ちた。

地上に降りた天使の囁き

「啓太、起きてください」

「啓太ってば。起きて！」

まだ、微睡んでいたのにシフォンに体を揺すられて起こされてしまった。

「シフォンは早いな。おはよう」

「おはようございます。そうじゃないです。早く来てください」
「ん？」

訳が判らずパジャマ姿のままシフォンに手を引かれてテレビの前に連れて来られてしまった。

テレビでは古い映画を放送していた。

「トラさんを見たいです」

「へえ？　ここに行きたいの？」

「はい、行きたいです」

その映画は確か夏休みとこの時期が正月にやっていた柴又が出てくる映画だった。

バリバリの下町でクリスマスに行く若い奴なんて殆ど居ないだろう。それでもシフォンは今日までしか俺の側に居ない。

シフォンが行きたいと言う場所に連れて行ってやるのが役立たずの俺に出来る最大限の事だろう。

そうは思っても俺はそう言う事に不慣れで仕方なく唯一無二の親友である男に電話で教えを乞うた。

するとマイルに先を越されたとかほざいていたがこの時期のデート情報を非の打ち所がないくらい教えてくれた。

あいつには悪いがポイントだけ掻い摘ませてもらう。

あまり遠くまで出かけない俺にとって柴又は凄く遠くに感じてしまう。

気を取り直して直ぐに着替えを始める。

時間は限られていて有効に使わないとシフォンに申し訳がない。こんな役立たずの側に居てくれるのは今日一日だけなのだから。

ネイビーブルーのパーカーの上に茶色のジャケットを羽織って黒のダウンコートで良いだろう。

下は色落ちしたいつも穿いているジーンズだ。

リビングに行くとしフォンが準備万端の格好で待っていた。

可愛い花柄ワンピースの上に少し短めで厚手の茶色いワンピースを重ね着している。

裾や袖から下の花柄ワンピースが見えていて良く似合っている。

コートは姉貴のお気に入りだったオフベージュのダッフル風のブリークレニットダウンを手にとっていた。「行こうか」「はい、啓太ってお洒落さんですね」

「たまにはね」

シフォンの飾り気のない言葉を素直に受け取る。

大通りまででタクシーを拾う。

「啓太、車ですか」

「そうだよ、先に寄っておきたい所があるからね」

手を上げると直ぐにタクシーが止まりドアが開いた。

シフォンを先に乗せて隣に乗り込んで運転手さんにとりあえずの行先を告げる。

しばらく走ると道路と並行して電車が走っているのが見える。

「うわぁ、電車です」

「もしかしてシフォンって車とか電車に」

「はい、乗った事ありません」

「それは、もしかして飛べるから？」

「そんな事したら人を驚かすだけじゃないですか。でも存在の力が弱まってしまった時は大急ぎで飛んで人が沢山いる所に移動する事もあります」

「そうなんだ」

納得はしたものの想像すると少し怖いものがある。

実体が儚く臍げな人が宙を飛んでいるって例のあれじゃないか。

もしかして例のあれは全て天使の見習いなのかもしれないなんて思
ってしまうのはシフォンに出会ったからだろう。

「それに私達はお金を持っていませんから。移動は歩きです。その
方が沢山の人と出会うチャンスがあるので」

「えっ、あつ、そうなの？　じゃ、お腹が空いた時とかはどうして
いるの？」

「困ってる人を助けたりすると食べ物を受け取る時があるので、それ
に燃費が良いので少しの食べ物で十分なんです。でもどうしても必
要なときは男の人に食べさせてもらう事があります」

「それってもしかして初めて出会った時のサラリーマンみたいな男
に？」

「はい」

素直に『はい』と言われても困ってしまう。

この世界ではそれを援交なんて呼ぶ行為に近いからでシフォンにと
う説明していいのか頭を悩ます。

「あつ、でも啓太が思っているような事は全然ないですよ。食事の
後で『良い事をしてよ』って言われたら笑顔でその男の人の所に飛
んでいくと男の人が逃げ出してしまいますから」

それはそうだろう真顔で笑いながら飛んでくる女の子なんて正しく
例のあれそのもので、本当にあつた怖い話になってそれこそ都市伝
説になりかねない。

普通の男の子ならプツと噴出して笑い出す所なのだろう。

「やっぱり、啓太は笑いませんね」

「ゴメンな」

「笑ったら教えてあげようと思ったのに」

「何を教えてくれるのかな？」

「笑わない啓太には教えられない事です」

本気とも冗談ともつかない事を少し拗ねた振りをして言っている。それでも俺は笑えない。

哀しみや苦しみと言った感情を失うと同時に喜びや笑顔も一緒に失ってしまったのだから。

柴又までの途中で浅草に立ち寄り後々必要な整理券を先に購入して柴又駅に向かった。

トラさんの銅像が柴又駅で出迎えてくれた。

そして帝釈天に続く参道を歩く。

参道の両側には煎餅屋や飴屋に甘味処やお土産屋などの手作り自慢のお店が立ち並んでいる。

何でもこの辺で一番古い商店街らしい。

その中にトラさんの口ケ地の団子屋もあった。

シフォンは嬉しそうに物珍しそうにキョロキョロしている。

周りを見渡すとやはり年配の人だらけだった。

帝釈天の二天門まで歩かずに前を歩いていたシフォンが振り返った。

「啓太、行こうか」

それは親友の言葉通りだった。

俺が柴又の帝釈天に行くと言うところ『おっさんか?』と切り返されてしまった。

仕方なく女の子と行くと告げると沈黙の間があり、直ぐに飽きるぞと言われてしまう。

こんな時期に柴又帝釈天なんかに行きたいと言う女の子は普通じゃない、日本の女の子がそんな事を100%言うはずがなく外国の子かと聞かれた。

流石にあいつの千里眼には驚かされる。

確かに別世界の女の子だ。

それも天上の世界だ。

予想通り浅草に行くことになりそうだ、一応シフォンに確認してみ

る。

「浅草にでも行ってみる？」

「うん、また車なの？」

「今度は電車で行ってみようか」

「えっ、本当に？」

「ほんとほんと、俺も基本的に嘘は付かないから」

タクシーの中から興味津々で電車を眺めていたので乗ってみたいの
だろうと思った。

電車に乗るとシフォンは俺の横に座り足をブラブラさせてまるで子
どもの様になっている。

すると突然シフォンが指でリズムを取りながらトラさんの有名なセ
リフを言いだした。

「四谷赤坂麹町、チヨロチヨロ流れるお茶の水、粹な姉ちゃん……」

「ああ！ 駄目。女の子がそんな事を言ったら」

「うう、結構毛だらけ猫灰だらけお尻の周りは……」

「それも駄目！」

「どうして駄目ですか？」

「シフォンは判ってて言っているよね」

「それを言っちゃお仕舞よ」

「お仕舞じゃないし、帰ろうか」

「嫌です」

シフォンが口を尖らせて拗ねている。

何故だか俺を笑わそうとしているように感じる。

隣同士で座っているけれど微妙な間がシフォンと俺の間に空いてい
る。

その間に手を下ろすとシフォンの手に触れてしまいドキツとして鼓
動が跳ね上がった。

「ご、ゴメン」

「平気ですよ、啓太なら」

そんな事をサラツと言っているがシフォンの顔がどこなく赤い。そんな事を言われた俺の顔も赤くなっているだろう。

なんてぎこちない初々しいカップルなんだ。

カップル？

思考が悪循環して顔がさらに赤くなってしまった。

気まずさを隠すように窓の外を見ると建設中のスカイツリーが天に届かんばかりに誇らしげに真っ直ぐに建っている。

浅草に付いて目指すは浅草と言えば雷門、雷門と言えば浅草の恐らく一番有名なスポットだ。

「うわぁ、大きい……」

シフォンが雷門の顔とも言うべく700キロの巨大な提灯を見上げて声を上げている。

雷門は風雷神門と言うのが正式名称で……あいつの細やかな説明が蘇る。

確かに右に風神が左に雷神がそれぞれ睨みを利かせている。

それにしても外国の人が多い。

それもその筈で日本を紹介する外国人向けのパンフレットの表紙に必ずと言っていいほど写真が載っている超有名なランドマークなのだから。

それと若い人も多くこの時期だからなのかカップルが異常に目につく。

カップル達は楽しそうに腕を組んだり手をつないだりしている。

「シフォン、置いていくぞ」

「啓太、待ってください」

小走りで駆けてきて俺の肘の辺りをちょこっただけ摘まんだ。

雷門と書かれた大きな提灯をくぐると反対側には正式名称の風雷神門と書かれていて風神・雷神と対照となる様に水をつかさどる竜神様の天龍像と金龍像が奉安されていた。

そして仲見世は帝釈天参道の商店街とはまた違う感じで石畳の両側

に綺麗な電飾看板が取り付けられ統一感があってこれはこれで良い味を醸し出していた。

それにしても年末だからだろうか人が多い。

俺の肘を掴まんでいるシフォンを見下ろしてシフォンが掴まんでいる腕を腰に当てた。

「ほら」

「えっ、良いんですか？」

「まあ、繋いでおかないと迷子になりそうだからな」

「ぶう、私はペットじゃありません」

「可愛い子犬見たいだぞ」

「啓太は酷いです」

そう言いながら俺の腕を叩いた。

ふつと鼻を鳴らすとシフォンが俺の顔見て微笑み腕を組んで来た。

「啓太はやっぱ優しい人です」

「一応、俺も男だからな」

柔らかい物が腕に押し当てられているがそれには蓋をしておく。

仲見世で焼きたての人形焼を買って頬張りながら歩く。

宝蔵門をくぐり金龍山浅草寺の本殿に行き参拝する事にした。

「どうやるのですか？」

「ん？ 合掌して一礼してから南無観世音菩薩と唱えるんだよ」

「はい」

2人で並んで合掌して目を閉じて一礼する。

「「南無観世音菩薩」」

「ここの本尊の観世音菩薩は仏様の中でも最も慈悲深い仏様で人の哀しみを取り除き楽しみを与えてくれるんだって。まるでシフォン達みたいだね」

「えっと大先輩なのかもしれません」

あいつ情報からピックアップしてシフォンに教えると顔を赤くしてモジモジしている。

凄く微笑ましく感じる。

微笑ましい？

もしかして俺って笑っているのか？

そんな筈はない……

そんな考えを打ち消すように浅草寺からレトロ感満載の花やしきに向かった。

が、花やしきの東ゲートが工事中になっている。

仕方なく案内に従い笑運閣ゲートに向かう。

笑う門には福来るみたいな俺にしてみれば笑えない名前の建物だ。門をくぐり目の前にある遊園地はレトロというより……

シフォンの瞳が輝きを増しているので止めておこう。

フリーパスを買わないで回数券を買った事に胸をなでおろしたのも束の間だった。

「啓太。あれが良いです」

シフォンが指差したのは日本最古のローラーコースターで花やしきの名物アトラクションだった。

花やしきがシフォンと同じく初体験の俺でも知っている奴だ。

「凄くドキドキしますね」

「そうだね」

小さなコースターに乗り込んで肩と肩が密着するくらい隣にいるシフォンがそんな事を言っている。

周りの建物が異常なほど近い。

係員の案内と警報音の様な甲高い音が鳴り響く。

コースターが動きだし坂をカタカタと音を立てながら登りはじめたと思ったら急降下をした。

左に旋回して下りながら花の湯を潜り抜ける。

かなりアップダウンと振動が激しい。

民家の様な間をすり抜け周りからキヤーキヤーと絶叫が上がる。周りにあるものすべてが手を伸ばせば届きそうだった。

民家を潜ると終点と言うか乗り場になっていた。

坂を上り切るのに1分、坂を下ってから30秒ちよつとだったと思う。

「啓太！」

コースターを降りるとシフォンが俺の腕を引っ張った。

連れて行かれた先はローラーコースターの乗り場だった。

連続で3回も乗ってシフォンは満足そうだった。

フリーパスにしておけばよかった……

コースターに乗って満足したのかその後は園内をブラブラする。

元々植物園だったと聞いた事がありその為か園内には色とりどりの花や変わった植物が沢山植えられている。

するとシフォンが何かを見つけたようだ。

「啓太、あれ！」

シフォンの指の先には小さな池があり赤い可愛い橋が架かっている。

「しあわせ橋か、何だかな」

「どうしてですか？ 素敵です」

あいつ情報をシフォンに耳打ちするとシフォンがキラキラと瞳を輝かせて俺を見上げている。

「本当に願いがかなうんですか？ 振り向かないで渡り切ると」

「まあ、願掛けみたいな物かな」

困った人の願いをかなえる事が出来る天使の見習いが真顔で俺に聞いている。

「あつ。もしかして自分の願いは叶えられないとか」

「出来ます。でも禁止条項第3条で自分の願を決して叶えてはならないと禁止されているんです」

「そっか、それじゃ渡ろうか」

「はい、振り返っちゃだめですよ」

「了解しました」

シフォンが俺の手を取って歩き出し2人で橋を渡り切った。

「あの、啓太さんは何をお願いしたんですか？」

「ん？ 恥ずかしいから内緒」

「もう、ケチです」

「ケチ言わない、シフォンは何をお願いしたんだ」

「恥ずかしいから耳を貸してください」

屈んでシフォン顔に耳を近づけるとシフォンが耳打ちした。

天使の見習いは俺の事が最優先事項らしい。

その足でお化け屋敷に行ってみる。

鉄板の日本のお化け屋敷そのもので……

「ここのお化け屋敷って本物の幽霊が出るって噂なんだよ。一度来てみたかったんだ」

「な、何で中に入ってしまったってからそんな事を言うんですか？」

「シフォン、日本語が可笑しくなってるぞ」

「こ、怖いので嫌いです」

簡単に女の子に食事をご馳走するような見ず知らずの男が怖くなくて、ある筈の無い幽霊が怖いと俺の腕を掴んでいる。

まあ、天使や天使の見習いも本来ならある筈も無いか。

それに例のあれは天使の見習いかも知れない可能性が濃い。

チョット物音がしただけでシフォンの腕に力が籠り直ぐに躓きそうになる。

恐らく目を瞑って俺の腕にしがみ付いて歩いているに違いない。

「ちゃんと見てたか？」

「見てました。少しだけ怖かったですけど」

シフォンが涙目になっている。

時計を確認するとそろそろ移動する時間になっていた。

アトラクションをするにもあと一つくらいだろう。

「他に見たい物ってあるかな」

「あの上には何があるんですか？」

そこは笑運閣ゲートの屋上で俺も何があるのか知らなかった。

階段を上ると途中に赤い鳥居が現れ笑運閣ブラ坊神社と書かれていた。

屋上には小さな社があり不思議な形をした神様が祀られている。近くにある案内看板を読むと花やしきに宿る幸福の神様で球根の形をしているそうだ。

これがいっつ情報の中で唯一意味が判らない物だったけど今意味が判った気がする。

『求婚するなら球根頼み』か……

何でも良縁や結婚の神様として密かに話題になっているらしい。

芽をなでると良い出会いがあり腰をなでると球根の腰にちなんだ玉の輿ってベタだな。

とりあえず手を合わせてみた。

浅草寺といいブラ坊神社といい、まるで天使がらみの場所ばかりの様な気がするの俺だけだろうか。

柴又に行く前に立ち寄って購入しておいた整理券を確認して浅草駅近くの隅田川沿いにある水上バス乗り場に向かった。

隅田川にはアニメ界の巨匠がデザインしたスペースシップみたいな未来型水上バスが浮かんでいる。

何でもティアドロップをイメージしているらしい。

「涙の形ね。すげえじゃん」

「啓太、凄く綺麗です」

「乗るよ」

「えっ？ はい！」

ガルウイングの搭乗口から乗り込む。

本当にスペースシップの様になっている。

中に入ると先進的と言うか結構広いスペースなのに窓際にあるベンチシートとその横にあるテーブル付の椅子しかない。

後ろには弓なりのベンチシートがあるようだ。

で、時期が時期だけに周りはお約束通り恋人達ばかりで俺とシフォ

ンも照れながらテーブル付の椅子に座り窓の外に視線をやる。

流石にイヴとは言え平日なので子ども連れの家族は殆ど居なかった。浅草寺から花やしきへそして水上バスでお台場へ。

あいつが教えてくれた絶対にはずれの無いデートコースだった。

何故、俺とそう変わらない恋人いない歴のあいつが詳しく知っているのか疑問だった。深く考えない様にしよう。

それこそ一人でシミュレーションなんてしている姿を想像しただけで痛すぎる。

この船は大きな窓が多用されていて結構開放感がある。

橋の下を通る度にシフォンは口を開けて上の窓を見上げている。

「シフォン、口が空いてるよ」

「ふえ、あつ、はい」

恥ずかしそうに俺の方を見ている。

そんな顔で見られると……

何かが俺の中で変わり動き出している。

でも、気付いてしまったら何かが起こりそう。で怖くて気付かない振りをした。

レインボーブリッジの下を通過するとお台場が見えてくる。

お台場は元々ペリーが来航した時に江戸幕府が埋め立てて造らせた砲台の事で今もその面影を残す砲台がある。

確か一度も使われずに開国に至ったはずだ。
そんな事を頭の中で復唱していた。

水上バスを降りるとそこは恋人達の聖地と化していた。

「啓太、海です！」

「風が冷たいね」

シフォンが嬉しそうに手すりから体を乗り出している。

不思議な色のシフォンの髪が風に吹かれて揺れている。

海を眺めながら遅めのランチを食べて海辺を散歩しているとシフォンが観覧車に乗りたいと言い出した。

プロムナード公園を通り観覧車があるパレットタウンに向かう。
ここにはヴィーナスフォートなんかがあったはずだ。

少し並んで大観覧車に乗り込む。

ゆっくりと上昇していき景色が開けてくる。

生憎の曇り空だったけど遠くまで見渡せる景色はとても綺麗だった。

「啓太に出会えてよかった」

「役に立たないけどな」

「そんな事は無いです。凄く楽しいです。それに」

「それに、何？」

「試験の最終日ですから」

「そうだね」

それ以上俺は何も言えない。

俺にはシフォンに叶えてもらいたい願いも無ければ恋を教える事も出来ないのだから。

そんな俺に対してもシフォンは微笑みかけてくれる。

観覧車を降りて俺とシフォンは周りの恋人達と同じようにゲームをしたり店を冷かしたりして歩き回った。

多くのカップルが集まっているのがアクセサリーを扱っているお店だった。

クリスマスプレゼントでも選んでいるのだろうか。

周りと同じようにアクセサリーを見てみるとペアのブレスレットに目が留まった。

2重巻の本革のブレスでシンプルなシルバーのリングとその中に銅のリンクがバランス良くって文字が彫られている。

「啓太、シンプルで素敵だね」

「そうだね」

シフォンも気に入ったようだ。

すると店員の女の人が声を掛けてきた。

「そちらの商品は当店の一押しで文字入れも出来ますよ」

「へえ、そうなんだ」

でも、文字入れには少し時間が掛ると告げられた。

「仕方がないか。今日しかないからね」

「そうですね。とてもお二人にお似合いだと思います」

諦めようとする店員さんが残念そうにしている。

俺が立ち去ろうとするシフォンが俺の腕を掴んだ。

「啓太。ちょっと待ってください」

「別に構わないけど」

「あの、それを持って少し見せてもらえませんか」

「はあ」

店員さんが不思議そうな顔をしてペアブレスを持ってシフォンの前に差し出すとシフォンが店員さんの手を包み込むように掴んだ。

その一瞬、光に包まれたような感覚に陥る。

それは眩暈がしたような感じだった。

すると目の前に店員さんの満面の笑顔があった。

「ご注文の品です。ご確認をどうぞ」

「えっ、はい」

店員さんが差し出したケースを見ると確かにシルバーと銅のリングに俺の名前とシフォンの名前が刻印がされている。

シフォンの方を見るとチョロツとベロを出している。

天使の見習いが力を使った瞬間だった。

思わず肩から力が抜け支払いを済ませそれぞれの腕に付けてもらった。

「あのな、シフォン。あれほど人前で力を使うなって言ったのに」

「啓太の為じゃないです。店員さんが困っていたので助けただけです。天使の見習いの唯一の仕事ですから」

「本当に驚かせやがって」

「えへへ、啓太に怒られた」

コツンとシフォンの頭に拳を当てると頭に手を置いて喜んでいる。何で怒られて喜ぶんだよと思うが良しとしよう。

シフォンも気に入ったプレスが手に入ったのだから。

でも、シフォン達が持つ力の大きさに驚いたのは本当だ。

「なあ、シフォン。どうして彼女の願いを聞かなかったのにあんな事が出来るんだ？」

「ええつとですね。基本的に願い事がある人が天使の見習いに触れると願いが叶うんです」

「それじゃ、ぶつかっただけでも叶ってしまうんじゃないか」

「その為に私達が鍵の役名をしているんです。私達天使の見習いが叶えてあげたいと思わない限り力は発動しません」

「それで第二条があるんだな」

「はい、そうです」

お台場は噂通り飽きない場所だった。

色々な複合施設が隣接していて時間を忘れてしまう。

レストランで夕食を済ませ遊んでいると結構な時間になっていた。

イルミネーションが煌めき。

大きなツリーが目の前にあり。

レインボーブリッジがライトアップされている。

何処からかクリスマスソングが聞こえ聖地たる所以が実感できる。

気が付くと今日と言う日もあと1時間で終わりを告げようとしている。

そしてそれはシフォンとの別れの時でもある。

かなりのハイテンションだったシフォンも大人しく俺の横に居てくれる。

「ありがとうな」

「啓太にそんな事を言われたら私はどうすれば良いんですか？ お礼を言うのは私の方です」

「そんな事はないよ。凄く楽しかったよ」

「えへへ、何だか嬉しいです。あまり人にそんな事を言われたことが無いから」

シフォンの言葉に違和感を覚える。困っている人を助け苦しんでいる人を救ってきたシフォンに感謝しない人が居ない訳がない。何で『ありがとう』って言われたことが無いんだ。

「なあ、シフォン。俺がもし笑ったら何を教えてくれるんだ？」

「そ、それは教えられません。啓太は笑ってくれませんか」

しあわせ橋でシフォンが願った事は『俺が笑えますように』だった。何故かシフォンが俯いてしまった。

そんなシフォンの姿を見て何かを俺に隠している事に気付いた。

「それじゃ、質問を変えるよ。俺に何を隠しているんだ？」

「啓太はズルいです」

天使の禁止条項第一条の一は『天使は人を欺いてはならぬ』隠す事は出来ても嘘を付く事は出来ないのだろう。

俯いているシフォンの顔を見た時にはつきりと気付いた。

光るものがシフォンの握りしめている拳に落ちた。

「天使の見習いには寿命がありません。でも地上に降りて試験が始され万が一合格できない時は光の粒子に戻ってしまうんです」

「それってつまり存在が無くなるというコトなんだな」

「はい、光の粒子になって次に生まれてくる天使の見習いの卵になるんです」

「それじゃ、俺の願を叶えれば」

「それでも合格は出来ないと思います。私はドジで失敗ばかりして合格ラインに届かないと」

「でも、やってみなきゃ判らないだろ」

「出来ないです！」

シフォンが涙をポロポロと流しながら真っ直ぐに俺の瞳を見ている。俺自身が大嫌いな俺の紺碧の瞳を。

「願いを叶えれば啓太の記憶から私は消えてしまっんです」

「だから感謝された事が無いって」

「はい、それに啓太から私が消えてしまっって思うと胸が苦して」

「バカだな、天使になりたいんだろ」

「それすら今は判らないです。こんな気持ち初めてで」

「このままじゃ消えて無くなってしまっただぞ」

「こうなるんじゃないかって思っていました。だから最後は私を助けてくれた優しい啓太の側に……」

シフォンが俺のジャケットを両手で握りしめ俯いたまままで泣いている。

今の俺には抱きしめてやる事しか出来なかった。

Keisuke・Kの哀しげなクリスマスソングが何処からか流れてくる。

思わず空を見上げた。

とても切ない彼の声とシフォンの泣き声が星すら見えない夜空に吸い込まれていき、それに呼応するかの様に雪が揺られながら舞落してきた。

それはまるで空に帰るために翼を広げて羽ばたいた天使が落としていった羽の様だった。

頬に雪が舞い落ち水滴になる。

冷たい筈なのに何故か温かい物が俺の頬を伝う。

それは忘れていた感情が戻ってきた瞬間だった。

どうして今日なんだ？

こんな思いを再びするのなら出会いたくなんて無かった。

それは俺が気づかない振りをしていた物だった。

シフォンと過ごすうちに停滞していた俺の時計の針が動き出した。

あの音はその音だったんだ。

シフォンを失うのが怖い。

これが恋なのかなんて俺自身にも判らない。

だからシフォンに教えるなんて不可能だ。

それなら俺に出来る唯一の事はシフォンに俺の願を叶えてもらい天使にしてやる事だけ。

何もしないで手を拱いているのはもう2度とごめんだ。

シフォンの肩に手を置いてシフォンの体を離してシフォンの顔を見た。

「啓太、泣いてるの？」

「ああ、感情が戻っていたんだ。シフォンと出会って。俺の願を叶えて欲しい」

「でも、それじゃ2度と」

「第二条だよ」

「やっぱり啓太は優しいです。願いを頭の中に思い浮かべて私の体に触れてください。そうすれば」

「判った」

「啓太……」

「シフォン、大好きだよ」

哀しさや苦しい事を忘れてはいけなかったんだ、悲しみや苦しい事を知るから喜び笑いそして優しく出来るんだ。

今なら判る俺の願は哀しさや苦しい事を忘れ去る事じゃない。

心から俺の願を祈り小さなシフォンの唇に優しく重ね合う。

光の粒子が弾ける様に飛び散り大きく優しい光につつまこまれた。

すまいる

年が開け四日から大学の講義が始まる。

新年初日の最後の講義を教室の窓際に座り受け終わって窓から外を見ていると親友であるノツチこと野地が声を掛けてきた。

「マイル、相変わらず浮かない顔をしているな」

「ほっとけよ」

「それより驚いたぞ。家族の命日に記憶喪失になるなんて」

「俺の方が驚いたよ。でも不思議なんだ。イヴの前後の記憶は殆ど無いのだけど家族の事は覚えているし辛かった事も苦しかった事も

……」

「それって感情が戻ったって事だろ」

「多分な。俺の中ではとづくに整理がついてることだけだな」

「じゃ、無愛想な顔をしてないで笑ってみろよ」

「それが出来れば苦労はしないよ」

それが事実だった。

何があつたのかさえ思い出せない。

何処に居てどうやって家に帰ったのかも覚えていないし、もしかしたら家に居たのかもしれない。

それすら覚えがなく目覚めると記憶が無くなっていた。

けれど判る事もある。

それは確実に俺の中では何かが変わっていたと言つ事だ。

それと……

「なあ、その腕のブレスってペアだろ。どう言う意味だそれ」

「さあな、記憶が無くなっている事に気づいた朝に腕に嵌まっていたんだ。

それとこれがコートのポケットに」

何処かのチケットをノツチに見せる。

「何それ。花やしきの回数券じゃん、今度それで一緒に遊びに行こうぜ」

「はあ？ 3枚しか無いのに？ 男2人で？」

「当然お前の奢りで」

「ふざけるな、1人で行って来い」

「あんな、1人でシユミレートするのって寂しんだぞ」

「やっぱりしてたのか」

「やっぱりって。俺、お前に話した事あったっけ」

ノツチに言われてちぐはぐで不可解な事を言っている自分に気付いた。

聞いた覚えがないのに何処かで聞いた事がある様な気がする。

「それとそのプレスだけど何が刻印されてるんだ？ もしかしてお前……彼女の名前とかじゃないだろうな」

「そんな筈はないだろ見てみる」

プレスを2つとも外してノツチに渡した。

するとノツチがプレスから何かを知ろうと穴が開くほど見ている。

「No smile・No happy・の方はお前の名前のKeithaだな。でDreams Come True・の方は何だこれ？ Si40nって名前ですらないな。何なんだ、この番号？

宇宙人かなんかの認識番号か」

「認識番号？ SI40N？ 名前……」

「おいおい、マイルって言うか啓太お前マジで大丈夫か？ 顔色悪いぞ。まだ調子が悪いんじゃないや。俺の名前が判るか？」

俺が眉間に皺を寄せて頭を抱え込むとノツチが心配そうにしている。頭の中に濃い霧が掛っているようでそれが何なのか判らない。

「えっとノツチの名前は確か……」

「病院に行った方が良くんじゃないか？」

「野地だろ。それくらいは判るよ」

「ビビらすなよな。マジで焦ったぜ」

イヴの前後が記憶にない様にある部分だけに濃い霧が掛っている。

何かを思い出そうとすると頭に鈍い痛みが走りとても不快な感じがする。

それ以外は至って普通で痛みや不快を感じる事は無く寧ろすっきりしている。

俺とノツチが話している教室の入り口からノツチを呼ぶ声がした。

「ノツチン、先月分を集めて来たよ」

「悪いな、手間かけさせて」

その女の子はノツチの友達以上彼女未満の幼馴染だった。

「でもな、俺にも一つだけはつきりお前が変わったのが判るぞ」

「俺は何も変わってないよ」

「いや変わったよ。お前のその青い瞳が活き活きしているよ。まるで新鮮な鮮魚みたいだぞ」

「嫌な喻だな。それに新鮮な魚を鮮魚って言うんだろうが」

「そんな事はどうでも良いんだ問題はだな。百聞は一見にしかずだ。おーい、こっちこっち」

入り口で黒いポーチを持ってノツチを訪ねてきた女の子にノツチが声を掛けて手招きをすると彼女が教室に入ってきた。

「あいつの目をその瞳で見つめてみるよ」

ノツチが訳わからない事を俺に言う。

「なあに、ノツチン？」

「啓太の顔を見てみるよ何か変わっただろ」

「えっ？ マジで？」

「良いから見てみるよ」

「うん」

彼女が首を傾げて俺の顔を覗き込んでいる。

俺が少し顔を上げると彼女の顔が真っ赤になった。

「う、うわあ。け、啓太。そんな目で見ないでよ。ドキドキしちゃうじゃん。私には心に決めた人が居るんだから駄目だよ」

「おいおい、藪から棒に。誰なんだよ、心に決めた人って」

「ノツチンじゃないから安心しな。それよりもスマイル貯金だよ」
彼女が笑いながら黒いポーチを置いて駆け出し教室から飛び出して行った。

スマイル貯金と言うのは毎月行われている賭け事のような物で元々は貯金ではなかった。

高校の時に俺の親友であるノツチと数人の仲間が冗談半分で始めた事で、誰が俺を笑わせる事が出来るかと言うものだった。

俺を笑わせた奴が独り勝ちと言う単純明快な賭けだ。

そして俺を笑わそうと必死になっていたが笑いを忘れた俺が笑う事などなく賭け金が増え続けていった。

大学に入るとキャリーオーバーが積み重なりかなりの金額になっていると言う噂が独り歩きし、参加者が急増してしまいノツチに強制的に俺名義の預金通帳を作らされてその月に集まったお金をノツチが翌月に入金していた。

それがスマイル貯金と言う訳だ。

いつもはノツチが集金しているのに年末年始で忙しくて彼女に頼んであったのだろう。

因みに預金額はノツチすら把握していない。

本人曰く毎月集まる金額すらかかなりの額になっていて冗談半分で始めたのに大事になってしまい怖くて見る事が出来ないそうだ。

まあ賭けの対象者である俺がそれを手にする事はある得ない話なので放置してある。

「完璧に振られな」

「完璧にとか。振られたとか言うな。まだ確定してないだろ」

「でもノツチじゃないって」

「お前にだって恋人のこの字も無いだろうが」

「まあな、恋人ね。カップルか」

時々こうしてキーワードの様な感じの言葉を聞くと胸騒ぎがして頭が重くなる。

そんな事を知らないノツチは話し続けている。

「自覚が無いのなら忠告しておく。生き返った様なお前のその青い瞳は非常に危険だ。特に男達は危機感を募らすだろう。何故か？お前の瞳で見つめられたら大概の女の子はキュン死するからだ」

「そんな事」

「無いと思うか？ 目の前で見ただろうが」

確かに今まで怖がられて逃げられる事はあったがドキドキすると言われた事は無いが彼女1人では何とも言えないのが本当だ。

「ははん、半信半疑だな。俺はお前の先の先まで読んでいるからなあいつを実験台にしたのは被験者を募るためだ」

「実験つて人体実験じゃないか。あほかノツチは」

「題してチキチキ女の子は啓太の青い瞳で恋に落ちるか作戦だ」

「恋ね……ノツチ、恋つて何だ？ 教えてくれ」

「あのなら、啓太。それが判れば俺もお前も苦労はしないだろ」

また頭が重くなってきた。

恋と言う言葉に反応したみたいだ。

こんな事が続き悪化すれば色々な言葉を聞いただけで反応を示し生活が成り立たなくなってしまうかもしれない。

違う事を考えようと頭を切り替えると俺より先にノツチが話題を変えてくれた。

「そつだ、啓太。聞いたか最近の噂を」

「噂？ なんだそれ」

「何でも近くの大学に出たんだつてよ」

「例のあれか？」

「違う違う、女の子だよ」

「女の子？ どの大学にも普通にいるだろう」

「普通じゃないんだよ。何でも行き交う人みんなに同じ事を聞いて回っているらしんだ」

「同じ事つて何を？」

「それはだな、あれだ」

「はつきりしない奴だな。俺が奥歯に物が挟まった様な良い方が嫌いなことぐらい知っているだろう」

自分で話を振っておいて肝心なところで口ごもるノッチのケツを叩いた。

「悪かった。実はな『笑わない人を知りませんか』って聞いているらしい。まるでお前の事を探しているみたいだろ。気を付けろよ」

「気を付けろって言われてもそれだけじゃ、どんな女の子かすら判らないじゃないか」

「そうだよな確かに。でもその女の子を見たって言う目撃情報は凄く多いんだよ」

「まるでひと昔前の都市伝説みたいだな」

例のあれ？

都市伝説？

胸がざわつく。

そこに飛び出して行ったはずのノッチの幼馴染の女の子が飛び込んできた。

被験者でも連れて来たのかと思ったがそうではなさそうだ。息を切らして気が動転しているようだ。

「ノッチン、大変だよ。出たの。出たんだよ」

「はあ？ 便秘でも出たのか？」

「マジで一回死んでみる？ そうじゃなくて例の女の子だよ」

「ああ、今その話を啓太につて。本当か？」

「うん、中庭で大騒ぎになってる」

「啓太！」

ノッチの声で2人して窓から身を乗り出した。

ここ窓からは少し離れているが中庭が見渡せた。

中庭では数人の学生が何かを遠巻きに見ている。

その真ん中には白い服を着た女の子が1人の学生の腕を掴んで何かを必死に訴えていた。

着ている白い洋服は所々茶色く汚れている。

まるで地に落ちてしまった真っ白い小鳥がもがき苦しんでいるように見えた。

翼には力なく綺麗な羽は薄汚れ、周りには抜け落ちてしまった羽が舞っているみたいだ。

何なんだ、この焦燥感？

心臓が早打ちし呼吸が浅く荒くなっていく。

頭の中の濃い霧が突風に流される様に急速に動き出している。

「まるで墮天使だな」

「墮天使……」

「おい！ 啓太！ 行くな！」

ノッチの叫び声など俺には届かなかった。

『墮天使』と言う言葉を聞いた瞬間にダウンコートを掴んで訳も判らず走り出していた。

心の奥で誰かが叫んでいる。

彼女に会いに行けと。

彼女の名前を叫べと。

突き動かされる様に校内を走り抜け階段を駆け下りる。

何事かと周りの奴らが驚いている。

そんな事はどうでも良い。

ただ中庭に全力で向かっていた。

中庭に走り込むと彼女が泣き叫んでいた。

「誰か教えて！ 笑わない人を教えて！ もう時間が無いのに判らないの！」

小さな体で地面に両方の拳を叩きつけている。

「教えて。お願いだから。判らないの……」

今度は頭を抱える様にして泣き崩れてしまった。

周りにいる学生はどうする事も出来ずにただ遠巻きに見ているだけだった。

このままだと警備員が来るか警察を呼ばれてしまっただろう。

訳が判らず飛び出してきてしまったが俺にも為す術が無かった。すると後ろからノツチの声がした。

「なあ啓太。彼女はやっぱりお前を探しているんじゃないのか？」

笑わない奴なんてお前ぐらいだろう。それにこのブレスの片割れはあの子のじゃないのか？」

「でも、俺は……」

「無理に思い出せとは言わないせめて彼女の側に行つてやれ、ほら」
そう言つてノツチがああのアブレスを俺の手に握らせた。
手を開くと赤茶色に輝くリングの刻印が目に入った。

「SI40N……シ・フ・オ・ン？」

「おい、あれ！」

男子学生の声で顔を上げると目の前で信じられない事が起き始めていた。

彼女が頂垂れたまま立ち上がり彼女の体から無数の光の粒子が舞い上がっていく。

悲鳴とも驚愕とも言えない声が周りから上がった。

その瞬間、俺の頭の中を失った記憶が駆け巡る。

酔っ払いに絡まれる女の子。

宙を飛ぶ少女。

美味しそうにホットミルクを両手で持つて飲んでいる姿。

料理をしている彼女の後姿。

ナンパされているのにニコニコ顔の彼女。

なす味噌を男顔負けでガツガツ食べている。

可愛い寝顔。

浅草ではしゃぎ回る彼女。

拗ねた顔。

何時でも真っ直ぐに俺を見つめている瞳。

大観覧車から見た景色。

大きなクリスマスツリー。

ライトアップされたレインボーブリッジ。
切なすぎるクリスマスソング。

別れの時。

最後の……キス。

弾ける様に飛び散った光の粒子。

無意識に何かに突き動かされるのではなく。

確かに俺は俺の意思で彼女の名前を叫んでいた。

「け、啓太？」

「シフォン、ゴメンな遅くなつて」

「啓太！」

シフォンの小さな体が俺の中に飛び込んできた。

不思議な事に周りの学生達は平然としている。

そして口々に……

「また、あいつか」

「マイルじゃん」

そんな事を言っている。

「シフォン、もう泣くな。な」

「ぬ、主様が……お前は2つの物を手に入れたって」

「2つの物？」

「うん、合格と恋だつて。どちらかを選ぶように言われえ……どう
しても啓太に会いたくて」

「で、合格を取り下げたと？」

「うう、らつて。どうしても会いたかったの。主様が恋を取るなら
条件があるって」

「条件？」

「私の中にある啓太の記憶と引き換えだつて猶予は3日って言われ
て」

「それで笑わない人なのか随分と厳しい試練だな」

「恋って苦しくて胸がキュンってするもんなんだね」

「さあな、俺にも判らないよ。俺が恋したのはシフォンが初めてだから」

「ふえ？ 啓太の願って忘れる事じゃ」

「違うよ、もう一度シフォンに会いたいって」

シフォンの瞳から涙が溢れてまるで子どもの様に泣きじゃくっている。

別れの言葉ではなく。

これから先に続くことに。

「シフォン、大好きだよ」

そう言ってキスをした。

シフォンはまだしゃくり上げている。

「バカだな。こんなに汚しちゃって」

「啓太？」

顔に付いた汚れをハンカチ代わりに持っているバンダナでシフォンの顔を拭くと驚いた様な顔で俺を見ている。

「ふふ、どうしたんだ？」

「け、啓太が笑った」

「ええ、だってシフォンお前まるで遊び回ってきた子犬みたいだぞ」

「もう、ペットじゃないです」

「ふふふ、あははは」

「もう、恥ずかしいです」

「へえ？」

シフォンにそんな事を言われて顔を上げると学生達の体が硬直している。

そして……

「あいつが笑ったぞ！」

「見た！ 見た？」

「ま、マイルがスマイルになった！」

などと口々に叫んでパニックになった蟻んこの様に動き出した。

すると後頭部に何かが当たった。

「啓太、さっきの閃光みたいのは何だ？」

「ノッチ？」

俺の後ろにはノッチが立っていて手にはポーチを持っている。

そのポーチで俺の頭を小突いたのだろう。

「まあ、良いや。今日でスマイル預金も終わりだし。誰が独り勝ちするのかと思ったら、その子だる柴又に行きたいって言っていた子は」

「えっ？ ああ、俺の一番のシフォンだ。シフォン、こいつが俺の親友の野地だよ」

「よろしく願います」

シフォンが深々とノッチに頭を下げると、ノッチの目には毀れそうになっているものが光っている。

「うっ、先を越されたか……それもこんなに可愛い子だったなんて俺も一緒に行けばよかった」

「まあ、それは今更だしな。悪いな振られたばかりなのに」

「振られた言うな！」

シフォンが声を上げて笑っている。

天使のご加護か。

はたまた主様のいたずらか。

ノッチの記憶にも変化が起きている事が判る。

「あのう、すいません。お腹が空いて」

「そうだね。あつ、給料日前で」

「ほら、持ってけよ。啓太にじゃないからな。唯一啓太を笑わせる事が出来るシフォンちゃんにだからな」

そう言つてノッチがポーチを放り投げて踵を返して歩いていく。クールを気取つて片手を上げて手を振つて……

あ、走り出した。

それも腕で顔を擦りながら。

「啓太、大好き！」

シフォンがありったけの力で俺に抱き着いてきた。
俺が笑顔と共に手に入れられたものは掛け替えのない存在だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106y/>

すまいる

2011年11月27日23時00分発行